

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 語形成と音韻現象：形態音韻論

著者	三間 英樹
雑誌名	神戸外大論叢
巻	67
号	3
ページ	13-30
発行年	2017-11-30
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00002147/">http://id.nii.ac.jp/1085/00002147/</a>

# 語形成と音韻現象：形態音韻論

三間英樹

【神戸外大論叢編集委員会による注】本稿は山口・三間・那須・本多 (2015) 『外国学研究 87 英語学基礎科目における教授方法の研究』(神戸市外国語大学外国学研究所) に掲載された論考と同様、英語学の教科書の 1 章として著者の三間氏が生前に執筆されたものです。『神戸外大論叢』三間氏追悼号に当たり、ご遺族および論叢編集委員会の許諾のもとに本稿をここに掲載させていただきます。掲載をご快諾くださったご遺族に感謝いたしますとともに、三間氏のご冥福を心よりお祈りいたします。

言語の大きな特質の一つに生産性がある。人は誰でも、今まで聞いたこともないような新しい文や単語が作れるのである。興味深いことに、そうして作られる新しい語や文は、話者が意識していないにも関わらず、必ずその言語の法則に従っている。例えば「うさぎの肉の入った汁」を一語で言う際、日本人なら大抵共通したある一つの単語を作る。この章では語形成の際に見られる様々な事実を通して、日本人や英語話者が無意識に行っている音韻的な計算について考察する。

## 1. 新語形成に見られる音変化

「新しい単語を作れ」と言われたらどうしますか？ ゼロから作ろうとすると、それが結構大変なことであることがわかります。例えば新種の生き物を発見したとします。それに全く新しい名前をつけてみようとする、どうしても今ある別の名前に似てしまって、「全く」新しい名前はなかなか思いつかないことはないですか？<sup>1</sup>

多くの人は新語を、全くのゼロからではない作り方をすることによって、割と簡単に作成することができると思います。それは、既存の単語や形態素を組

---

<sup>1</sup> いわゆる「キラキラネーム」はゼロからの名付けに近いかもしれませんが。漢字がある場合も、音に合わせて後から付けていることが多いです。

み合わせる、という方法です。上の例では、「手長猿」とか「紋白蝶」などという名前の作り方がそれです。これであればとても簡単に新しい生き物の名前が思い浮かぶでしょう（「青目猿」とか「ライオンペンギン」とか。これらは今筆者が適当に思いついただけで、具体的にどういう生態の生き物かさっぱり検討もつきませんが、何となくありそうですよね）。このような語形成は、文の生成と同様、非常に生産性が高いプロセスです。

興味深いことに、語形成の際にはしばしば音韻現象も同時に観察されます。例えば、実際にあるのかどうかわかりませんが、「ウサギの肉の入った汁」をどうやって言い表しますか？ 多くの人は「ウサギじる」と言うと思います。これはもちろん、「ウサギ」と「じる」というそれぞれ既存の単語を組み合わせで作られた新語ですが、ここではある音韻変化が生じていますね。そうです、「しる」と無声音だった語頭の子音が「じる」というように有声音へと変化しています。これは「連濁」と呼ばれる有名な現象ですが、このように、語形成に伴う音韻現象は世界中の言語に一般的に観察されるもののなのです。

次に英語で以下の (1a) と (1b) のペアを見てみましょう。今度は有聲・無声のような分節音に関する点でなく、強勢について考えてみてください。(1a) と (1b) はそれぞれどのような構造で、どのような強勢のパターンをしていますか？

- |     |    |             |             |              |
|-----|----|-------------|-------------|--------------|
| (1) | a. | black board | white house | fresh juice  |
|     | b. | blackboard  | White House | orange juice |

(1a) は形容詞＋名詞からなる名詞句 (noun phrase) を形成しています。この場合、この句で一番強い強勢は後ろの名詞の部分にあります。一方 (1b) は、独立した単語を組み合わせているものの、2語全体で一つの名詞（例えば「黒板」）を表しています。このようにして形成される語を「複合語 (compound)」と言いますが、この場合は一番強い強勢は前の単語の方にあります。もともと複合語は普通の名詞句が意味の上で特殊化して生じていると考えると（ただの「黒い板」が特に学校などの「黒板」だけを指すようになったりする）、もっとも強い強勢の位置が右から左へと移動していることがわかります。つまり強勢移動という音韻現象が、複合語形成という語形成に伴って生じているのです。（ところで複合語かどうかは2語の間にスペースがあるかどうかでは見分けることができない、という点も面白いですね。「大統領官邸」の場合は語頭の大字という手がかりもありますが、「オレンジジュース」の場合はそれさえありません。）

このように日本語でも英語でも、語形成にはしばしば音韻現象が伴います。以下ではこれら二つの相互作用に関するいくつかの現象を、日本語と英語を中心に見ていきます。

## 2. 日本語の複合語形成をめぐる

上では英語の複合語で強勢が移動することについて触れました。実は日本語でも、複合語形成の際に同様の操作を行っています。「ウサギじる」を例に考えてみましょう。「'」はアクセントのあるモーラを表し、無アクセント語は便宜上「=」で表すこととします。

- (2) a. ウサギ= + し'る → ウサギじ'る  
 b. おんな= + ここ'ろ → おんなご'ころ  
 c. ライオン= + ペンギン= → ライオンペ'ンギン

(2a) はたまたま語基の「しる」と同じ位置にアクセントが生じていますが、(2b) では位置が変化していますし、(2c) に至ってはもともと無アクセントだった語基にアクセントが生じています（これは存在しない語ですが、多くの人にとってこの位置にアクセントがあることが自然だと思います）。このように、日本語においても複合語形成の際には独特の「複合語アクセント規則」が働きます。それは英語より少し複雑なものですが、後部要素が長めのものの場合には比較的規則性が高いので、自由に複合語を作ってみたりして観察してみたら楽しいと思います。<sup>2</sup> どのようなパターンが見つかるでしょうか。

ところで (2) では、前節で見た連濁が生じています。この連濁には実はいくつかの決まり事があります。(2c) では連濁が生じていませんね。この理由は何でしょうか？すでに思いついた人もいるかもしれませんが、加えて次のような例を考えてみます。

- (3) a. きねん + パーティー → 記念パーティー  
 b. ゆうせん + シート → 優先シート  
 c. やさい + カレー → 野菜カレー

<sup>2</sup> 先行研究を調べたい人はまずは窪菌晴夫の一連の著作を読んでみるのが良いと思います。

## d. やま + スキー → 山スキー

(2c) と同じくこれらにも連濁が生じませんが、それはなぜでしょうか？ おそらく多くの人が持つ印象は、「これらの後部要素が外来語だから」ということではないでしょうか？ 外来語が連濁した例など、普段見かけませんよね。<sup>3</sup>

今当たり前のように言いましたが、このことはつまり、日本語の語彙の中にはいくつかの種類があり、それを我々が自然に認識していることを意味しています。外来語以外に我々が認識している語種としてどういうものがあるのでしょうか。音読みの漢字の熟語などからなる「漢語」もありますよね。これらにおける連濁について見てみましょう。

- (4) a.        けんしょう + せいかつ → 懸賞せいかつ  
       b.        師弟 + たいけつ → 師弟たいけつ

多くの人は連濁が生じないと感じると思います。つまり連濁は普通、(2a, 2b) のようなタイプの語にしか生じません。<sup>4</sup> これらの生じる語はどういうタイプのものですか？ いわゆる「大和言葉」ですね。これらは専門的には「和語」とも呼ばれます。このように連濁は、複合語の構成要素の形態的な情報を考慮しながら適用されるのです。

一方で音韻的な情報も影響を及ぼしている事実も観察されます。次の例を見てください。

- (5) a.        うさぎ + そば → うさぎそば  
       b.        おんな + かがみ → おんなかがみ

(5) の二語（適当に作りました）は前部要素に (2a, 2b) と同じ語を含んでいますが、連濁が生じていません。その理由は何でしょうか？ (5) の例に挙げられた語の特徴を良く考えると何かが見えてきます。気づきましたか？ 理由はおそらく、「後部要素にすでに有声阻害音（濁点のつく子音）がある」というこ

<sup>3</sup> 「野菜ガレー」と言う人に会ったことがあります。こう言う人は「カレー」を外来語と認識していないのであろうと思われます。他にもこのような例外的な例があれば探してみると面白いでしょう。見つけた人は教えてください。

<sup>4</sup> 「出刃包丁」、「刺身醤油」などのように、漢語でも連濁するものは多少あります。これも注3同様日本語らしさと関係しているのかもしれませんが。

とでしょう。このような場合には連濁が抑制される、という事実は非常に有名なもので、アメリカの言語学界への報告者にちなんで「ライマンの法則」と呼ばれています。<sup>5</sup>

#### (6) ライマンの法則

有声阻害音に先行する無声阻害音は連濁しない。

連濁やアクセントに関しては面白い現象がたくさん観察されますが<sup>6</sup>、最後に姓の形成に関して見てみましょう。(7) は「田」のつく姓ですが、(7a) と (7b) を比べてみると何か気づくことはありませんか？

- (7) a. よしだ=, いけだ=, あしだ=, まつだ=, おくだ=, やまだ=  
b. し' ばた, ふ' じた, か' どた, く' ぼた, と' みた, き' よた

アクセント記号からわかる通り、(7a) はアクセントを持たない姓、(7b) はアクセントのある姓です。そして興味深いことに、(7a) には同時に連濁が適用し、(7b) には適用していません。この二つはなんとなく関係がありそうな気がしますね。

この関係は 1960 年代から漠然と指摘されてきましたが、詳しいことはあまりよくわかっていません。姓という限られた語形成においてのみ観察されるようですが、それは何故なのか？「田」以外にはそれほど広く見られるものではないようですが、それは何故なのか？「田」のつく姓の中でも、(8) のようにこの傾向の例外になる姓もありますが、ではどういう場合に例外になるのか？

- (8) a. は' らだ, し' のだ, そ' のだ, か' ねだ, ほ' そだ, は' まだ  
b. おおた=, くわた=, ながた=, ひらた=, みやた=, むらた=

姓という身近なところにも語形成と音韻操作が関係する現象が見られ、面白いですね。そしてそこには、普段は意識していないさまざまな言語学的要因が影響しているのです。興味を持った人は上記のような謎について深く考察して

<sup>5</sup> 日本国内ではすでに賀茂真淵や本居宣長によって発見されていました。なお、この法則にも「避難ばしご」などの例外は存在します。

<sup>6</sup> 例えば「たぬきの汁の偽物」と「偽物のたぬきをつかった汁」をそれぞれ一つの複合語で言い表して、比較してみましょう。統語構造の違いが連濁の違いにつながるということがわかんと思います。

みてください。明確な答えが出なくても、きっと楽しいと思います。

### 3. 接辞添加と音韻変化

ここで再び英語に話を戻しましょう。英語は複合語の形成の際にあまり特別なことは起きないのですが、もう少し小さな単位での語形成の際には豊富な音韻変化が観察されます。すなわち接辞 (affix) が添加される語形成の際です。まずは (9)-(11) の単語のペアを見てみましょう。b の語は、a の語にそれぞれ -ity, -ic, -al という接尾辞を付加して形成されています。その際、a の語の何かが変化していることに気がつくますか？

- |         |           |           |          |            |              |
|---------|-----------|-----------|----------|------------|--------------|
| (9) a.  | public    | hostile   | divine   | similar    | relative     |
| b.      | publicity | hostility | divinity | similarity | relativity   |
| (10) a. | alcohol   | Iceland   | atom     | titan      | symphony     |
| b.      | alcoholic | Icelandic | atomic   | titanic    | symphonic    |
| (11) a. | parent    | origin    | nature   | accident   | instrument   |
| b.      | parental  | original  | natural  | accidental | instrumental |

わからない人は声に出して読んでみましょう。何かに気がつきませんか？ そうです、強勢の位置が変化していますね。上で見た日本語のケースと同様、語形成の際に強勢やアクセントの位置が変化することは世界の言語に頻繁に観察されます。なお、その強勢の移動先は、英語の強勢付与規則からかなりの部分が予測可能です。上の例の中には強勢の位置が変化していないものもありますが、それらはこの強勢付与規則がたまたま a と b の同じ音節に強勢を付与したからです。興味がある人は吉田・三間 (2014) などの強勢に関する入門的な文章を読んでみてください。

一方で以下のようなペアはどうでしょうか。(9)-(11) 同様、(12)-(14) の b の語は対応する a の語にそれぞれ -ness, -less, -lyなどを付加して形成されています。

- (12) a. comfortable deliberate accidental forgetful  
       b. comfortableness deliberateness accidentalness forgetfulness
- (13) a. conscience meaning expression humor  
       b. conscienceless meaningless expressionless humorless
- (14) a. previous exclusive accurate entertaining  
       b. previously exclusively accurately entertainingly

(9)-(11) のような強勢の移動は観察されましたか？ されませんね。ということは、英語には (9)-(11) のような強勢の移動を引き起こす接辞と、(12)-(14) のような強勢の移動を引き起こさない接辞の二種類があるということがわかります。

(9)-(14) では合計 6 つの接辞しか考察していませんが、ここにあげた以外の接辞についてその接辞がどちらのタイプか考えてみると楽しいでしょう。それぞれの接辞を含む具体的な単語をいくつかあげ、強勢の位置を語基と比較する、というわけです。ただし上記の通り、たまたま語基と同じ音節に強勢が来る場合もあるので、ある程度の数の例を考えてみるようにしてください。

これまでは強勢の移動について考えてきました。では次に、上記の接辞について他に何か変化しているものがないかどうか考えてみましょう。まずは (9)-(11) の三つの接辞を持つ、次の語について観察してみてください。強勢以外に何か変化は起きていませんか？

- (15) a. divine serene sane profound clear hostile  
       b. divinity serenity sanity profundity clarity hostility
- (16) a. tone meter state satire Semite episode  
       b. tonic metric static satiric Semitic episodic
- (17) a. nature grade rite mine crime nation  
       b. natural gradual ritual mineral criminal national

こちらは実は強勢よりわかりやすかったと思います。a の方では二重母音や長母音だったものが b の方では短母音に変化していますね。このような現象は短母音化 (vowel shortening) と呼ばれ、これも世界の言語に広く観察される現象



です。つまり、-ity, -ic, -al などの接辞は強勢の移動を引き起こすだけでなく、母音の長さも変化させる可能性があるということがわかります。

なお強勢移動と同様、短母音化がこれらの接辞に常に生じるかという、そうではありません。例えば -al の付く語で短母音化が生じないものは *tone/tonal*, *prime/primal* など多数見つかります。これは短母音化の条件として、これらの接辞が付加すること以外のものであり、*tonal* などではそれを満たしていないということを示しています。詳しい説明はここでは省きますが、興味のある人は調べてみてください。

では次に、-ness, -less, -ly などが付加される場合はどうでしょうか？ (12)-(14) でこれらは強勢を移動させないことを見ましたが、母音の長さは変化させるのでしょうか？

- |         |          |          |           |          |          |           |
|---------|----------|----------|-----------|----------|----------|-----------|
| (18) a. | shy      | same     | whole     | cute     | neat     | wide      |
| b.      | shyness  | sameness | wholeness | cuteness | neatness | wideness  |
| (19) a. | bone     | home     | shame     | name     | pain     | stain     |
| b.      | boneless | homeless | shameless | nameless | painless | stainless |
| (20) a. | close    | deep     | easy      | free     | great    | mild      |
| b.      | closely  | deeply   | easily    | freely   | greatly  | mildly    |

どうですか？ こちらは母音の変化はありませんね。つまり -ness, -less, -ly などは強勢の移動を伴わないだけでなく、母音の変化も起こさない接辞だということがわかります。<sup>7</sup>

これはとても興味深い一致ではないですか？ 強勢移動の可能性がある接辞は短母音化を引き起こし、強勢を移動させない接辞は短母音化を引き起こしていません。この関係を (21) にまとめてみましょう。

- |         |                     |       |        |
|---------|---------------------|-------|--------|
| (21) a. | -al, -ity, -ic :    | 強勢移動可 | 短母音化   |
| b.      | -ness, -less, -ly : | 強勢保持  | 母音そのまま |

このような一貫性は何を示唆しているのでしょうか？ 広く認められている見方と

<sup>7</sup> 「ボンレス (< boneless)」、「ステンレス」(< stainless) など、日本語の方で短母音化が起きているのが面白いですね。興味のある人は理由を考えてみましょう。ヒントは「音節構造」です。

しては、英語の接辞の中に「音韻規則の適用を受けるかどうか」という点で分けられる二つの種類がある、ということです。つまり、強勢付与や短母音化に限らず、a. のグループに属する接辞は広く音韻規則の適用を受け、逆に b. のグループに属する接辞は受けない、と考えられているのです。専門家の間では、前者のグループを「クラス1」、後者を「クラス2」と呼ぶことが多いです。

- (22) a. クラス1：音韻規則適用  
b. クラス2：音韻規則非適用

つまりこれらのクラスに属する接辞は、その接辞自身の性質として (22) のような性質を持つと考えられているのです。<sup>8</sup>

(22) にまとめた通り、この「クラス性」という概念は英語の接辞付加に一般的に関わってくる非常に重要なものです。次に接尾辞ではなく接頭辞に関して、強勢や短母音化以外の音韻現象について見てみましょう。(23) の語では否定の接頭辞が語基に付加されています。その際、何か気づくことはありませんか？

- (23) a. impossible, imbalanced, immortal  
b. indifferent, intolerable, insensible, insurable, injustice, invalid, informal, ineffective  
c. i[n]complete, i[n]glorious

(23a) は綴りにも変化が生じているので明白ですね。そうです、接頭辞である in- の /n/ が [m] へと変化していますね。一方 (23c) の方は綴りに変化はありませんが、音声的には問題の /n/ が [ŋ] に変化しています。

どうしてこのような変化が生じるのでしょうか？ どういうときに (23a) の変化が生じ、どういうときに (23c) の変化が生じるのでしょうか？ 子音表を頭の片隅に置きながら、(23a, c) の語基の最初の子音に注目すると何かが見えてきませんか？ また、それと (23a, c) の変化後の鼻音とは何か関係がないですか？ (23a) の語基は全て両唇音、(23c) の語基は全て軟口蓋音で始まっていますね。そしておのおのの変化で /n/ は、(23a) では両唇音の [m]、(23c) では軟口蓋音の [ŋ] になっています。つまり、後続する語基の最初の子音と同じ調

<sup>8</sup> 適用する場合、接辞が付加されるたびに繰り返し行われることになるので、専門的にはこの性質があることを「循環的 (cyclic)」であると言ったり、適用しないことを「非循環的 (non-cyclic)」であると言ったりします。

音点の鼻音へと変化しています。これは多くの言語に見られる一般的な変化で、鼻音同化 (nasal assimilation) と呼ばれます。(なお英語の場合、後続子音は鼻音も含めた閉鎖音に限られます。<sup>9</sup> (23b) で両唇性のある /f, v/ で変化が生じていないことに注意してください。)

では次に、in- と同じく否定の接頭辞である un- について、(23) と同様の分類を試みましょう。すなわち、語基の最初の子音の調音点によって分類してみるわけです。un- も in- と同じく /n/ で終わりますが、同じような変化は観察されるでしょうか？

- (24) a. unpleasant, unbalanced, unmarked  
 b. untouchable, undamaged, unnatural, unsatisfied, unchanged  
 c. uncontrolled, ungrammatical

明らかに un- の場合はどのようなときでも何の変化も被っていませんね。<sup>10</sup> このことから un- は in- と異なり、鼻音同化という音韻変化を受けないという性質を持っているとみなせます。つまり、in- はクラス 1、un- はクラス 2 に属していると分類することができるのです。

このように英語では、音韻変化を被るかどうかで接辞は二つのタイプにわけることができそうです。この事実自体は構造主義言語学の時代から知られていたようですが、80 年代に語彙音韻論 (Lexical Phonology) と呼ばれる分野の中で盛んに研究されました。その結果、英語に限らず多くの言語で同様の差があることがわかってきました。では日本語はどうでしょうか？

実はアクセントの中に類似の分類があることに気づきます。人名に付加する次の二つの接辞「さん」(25b) と「家(け)」(25c) のアクセントを比較してみてください。

- (25) a. ほ' しの やま' ぐち ほんだ=  
 b. ほ' しのさん やま' ぐちさん ほんださん=  
 c. ほしの' け やまぐち' け ほんだ' け

<sup>9</sup> 鼻音は口腔内では完全に空気の流れが遮断されるので、閉鎖音の一種です。英語では nasal stop とも呼ばれます。

<sup>10</sup> 語彙のレベルで、ということです。発話のレベルでは、発話速度が早い場合にはしばしば (24) の語でも鼻音同化が生じます。また、日本語でも発話レベルで同様の同化が生じています。「参加」と「さんま」の「ん」のそれぞれの調音点を観察してみてください。

「さん」は語基 (25a) のアクセントをそのまま保持しますが、「家」は新たなアクセント付与を行い、その直前のモーラにアクセントが付与されていますね。このように接辞（あるいは形態素）ごとの「アクセントを保持するかどうか」に関する語彙的な差が、日本語においても認められます。後述するように日本語には他の点での語彙的な差が大きいためあまり顕著ではありませんが、(22) の二分法はかなり普遍的な言語の性質であるとみなして良いでしょう。

#### 4. 変化の中の多様性

前節では「規則が適用するかどうか」で形態素が二種類にわかれることを見ました。しかし規則にはいろんな種類があります。例えば英語の強勢付与規則にはいくつかの種類があります（吉田・三間 (2014) など参照）。従って必然的に、規則が適用する方のグループの中にはいろんなタイプの形態素が存在することになります。

例えば英語の形容詞を形成する接尾辞 *-al* の強勢パターンを観察してみましょう。(26) を観察して、この接尾辞がどのようなパターンを持っているか考えてみてください。ヒントとして、音節の重さが関係します。<sup>11</sup>

- (26) a. parent    origin    nature    accident    instrument  
       b. parental    original    natural    accidental    instrumental

(26b) の多くの語で語基とは違う音節に強勢が与えられているので、*-al* はクラス1であることがわかります（*nature* では短母音化も生じていることに注意しましょう）。左の三つの語は後ろから3番目の音節に、右の二つの語は後ろから2番目の音節に強勢が与えられています。これは、後ろから2番目の音節が重音節であるか軽音節であるかが関係しています。右二つの語のようにそれが重音節であればそこに、左三つの語のように軽音節であればその前の音節に強勢が与えられるのです。このように後ろから2番目の音節が重要であり、最終音節は影響を及ぼさないのので、ここでは最終音節は韻律外 (*extrametrical*) であると言います。つまり *-al* という接尾辞は、最終音節を韻律外にするという性質を持っています。

<sup>11</sup> 子音や二重母音・長母音で終わる音節を重音節 (*heavy syllable*)、短母音で終わる音節を軽音節 (*light syllable*) と言います。

次に、同じく形容詞を作る接尾辞である *-ic* について見てみましょう。上と同じように *-ic* の強勢パターンについて考えてみてください。

- (27) a. alcohol Iceland atom titan symphony  
b. alcoholic Icelandic atomic titanic symphonic

(27b) では全ての語の強勢が語基とは異なる音節に与えられているので、*-ic* もクラス1であることがわかります。しかし強勢パターンは (26b) とは異なりますね。どの語も後ろから2番目の音節に強勢を持っています。これは *-al* と異なり、*-ic* では最終音節が韻律外になっていないことを意味します。つまり、同じ形容詞を作るクラス1の接尾辞でも、*-al* と *-ic* は異なる性質を持っているというわけです。この他にも英語のクラス1接尾辞の中には、いくつかの異なる強勢パターンがあることがわかっています。

では日本語はどうでしょうか。標準語の動詞のアクセントを観察してみましょう。(28a, b) のそれぞれのアクセントパターンはどのようなものですか？

- (28) a. 食べる、食べろ、食べます、食べさせる、食べられる、食べさせられる  
b. 食べた、食べて、食べさせた、食べさせて、食べさせられた

二種類のパターンが認められますね。(28a) は後ろから2番目、(28b) は後ろから3番目のモーラにアクセントを与える、というように、一番右の形態素（ここではいわゆる助動詞）ごとに位置に関する指定が異なっていることがわかります。

また日本語には次のようなパターンを持つ形態素もあります。

- (29) a. やま' ぐち      こ' うべ      ふな' っしー  
b. やまぐちてき=      こうべてき=      ふなっしーてき=

一目瞭然ですね。「的」という形態素は、「全体を無アクセントにする」というアクセント特性を持っています。この形態素は生産的でいろんな単語に付加することができますから、皆さんでもいろんな語を作って確かめてみてください。また、無アクセント化する形態素は「的」以外にも結構多くあるので、いくつか見つけてみるのも楽しいでしょう。

さらに日本語には、次のようなちょっと複雑なパターンを持つ形態素もあります。どういうパターンかまずは考えてみましょう。

- (30) a. よどがわ= しゅくがわ= かもがわ= とねがわ=  
 b. ながら' がわ たかせ' がわ わたらせ' がわ ミシシッピ' がわ

(30) はともに川の名前ですが、(30a) は無アクセント、(30b) は「川」の直前にアクセント、と異なった振る舞いを示しています。どういうときにどちらになるのでしょうか？ (30a) には何か共通性があることに気がつくますか？ 全体の長さに着目してみましょう。(30b) の長さはまちまちですが、(30a) はすべて全体として4モーラになるものばかりですね。つまり「川」という形態素は、「4モーラになる場合は無アクセント、それ以外は直前にアクセントを与える」という性質を持っているのです。<sup>12</sup> この形態素も生産性が高いので、いろんな(架空のものも含めて)川の名前で確認してみましょう。

このように日本語でも英語でも、強勢・アクセント規則が適用するという形態素の間にはさらに個別性が認められることがわかります。今回紹介した以外のアクセント・強勢パターンや、アクセント・強勢以外の個別性もまだまだありますから、皆さんでも探してみると楽しいでしょう。

## 5. 日本語の語彙層

実は日本語には、独特の分類による音韻的な振る舞いの差が観察されます。連濁について振り返ってみましょう。連濁は日本語の全ての語彙に適用するわけではありませんでした。基本的には連濁は和語にのみ生じ、漢語や外来語には生じません。このような語種の差による振る舞いの違いが、他の点でもいくつか観察されるのです。

まず和語、漢語、外来語について、「パ行」で始まる語をリストしてみてください。外来語については簡単にたくさん思いつくことと思います。でも漢語や和語はどうでしょう？ 全く思いつきませんね。実際、和語や漢語には /p/ で始まる単語はありません。裏返して言うと、外来語以外には「/p/ で単語を始めてはいけない」という制限が働いている、と考えられます。<sup>13</sup>

<sup>12</sup> 実は英語にも長さによってパターンが変わるものがあります。-ate を含む多くの語は *animate*, *contaminate* など接尾辞の左側に主強勢があるパターンですが、*debate*, *create* など -ate の前に軽音節が一つだけの語は接尾辞自身に主強勢があります。これは韻脚 (foot) という構造が作れるかどうか起因していると思われます (Zamma (1993))。「川」の振る舞いの差がそういう構造的な原因によるものかどうかは今のところ不明です。

<sup>13</sup> これは日本語の歴史と関係があります。日本語では /p/ の音は室町時代には /f/ (のちに /h/ や

つぎに促音（「っ」）や撥音（「ん」）に続く音の種類を考えてみましょう。ともに元々和語にはない音なので思い浮かべにくいですが、動詞の活用形に見ることができます。いくつか該当する語彙を列举してみましょう。

- (31) a. 乗った、減った、滑った、喋った、走った、しくじった  
 b. はったつ、がっこう、しゅっぱつ、てっぱん、あつとう、べっかく  
 c. ヒット、タップ、ピック、タッグ、ブッダ、スノップ
- (32) a. 飲んだ、積んだ、止んだ、仕込んだ、絡んだ、企んだ  
 b. うんぱん、しんぶん、れんたい、うんどう、れんこう、あんごう  
 c. シャンプー、ルンバ、ヒント、パンダ、インク、リング

何かがぼんやり見えてきませんか？ まず促音については、外来語では後ろに有声音が現れることもあります（31c）、和語と漢語では無声音しか現れていませんね（31a, b）。一方撥音については、和語では後ろに有声音しか現れていないのに（32a）、漢語と外来語では有声音も無声音も現れますね。<sup>14</sup> (31), (32) からわかることを以下のように分類してみましょう。

(33)

	促音の後の有声音	撥音の後の無声音
和語	不可	不可
漢語	不可	可
外来語	可	可

こうして見るとどのような音連鎖が許されるかは、語彙の種類によって決まっていることがわかります。(33) から、和語には「促音の後は無声音でなければいけない」、「撥音の後は有声音でなければいけない」という二つの制限が働いているが、逆に外来語にはそのどちらの制限が働いていない、というような差があることが見て取れますね。これら以外にも語種による制限がありますから、興味のある人は深く考えてみると楽しいでしょう。例えば、和語はある音で始まることが非常に少ないですし、漢語の形態素である漢字のサイズにはある制限があることがわかっています。

---

/w/) に変化してしまったので、/p/ にあたる音は存在しなくなったのです。

<sup>14</sup> 「うんこ」など、タブー語彙については和語でも無声音が後続することがあります。これは和語という大きいカテゴリーの中にもさらに細かいカテゴリーが存在していることを示しています。



以上見てきたように日本語には、「規則が適用するか否か」という二分法以上の分類があることがわかりました。それは「語種」という、日本語の語彙の歴史を反映するような区分でした。この語種の差は文字の表記の違いにも現れていたりして、直感的にも理解しやすいものですね。英語の接辞のクラス性の違いも、ゲルマン系かラテン系かという同様の差に一致するところも多いようです。<sup>15</sup> このように語種という形態的な性質は音韻論と密接に関係しているのです。

## 6. 語形成と韻律条件

これまでは形態素の種類、すなわち形態的な条件が音韻現象を引き起こす事実についていくつか見てきました。では逆に、音韻的な条件が形態現象を決めている例について、最後に見てみることにしましょう。

まずは英語の比較級・最上級について考えてみましょう。これらには接尾辞の *-er/-est* を付けると中学校で習いますが、どういうときにそのパターンを取り、どういうときに *more/most* を前に置くか考えたことはありますか？ 習ったことがある人、あるいは漠然とわかっている人もいるかもしれませんね。まず、1音節の形容詞のときには前者のパターンになります。*big/bigger, smart/smarter* など、該当する語の適切な形を簡単に思いつくことができます。逆に *convenient* は *\*convenienter* でなく *more convenient* です。

しかし以下のような語は1音節ではありませんが、*-er/-est* が付加することができます。スペースの都合上 *-er* のみを示しますが、*-est* も同様です。

- (34) a. funny narrow gentle clever  
b. funnier narrower gentler cleverer

これらは何故 *-er/-est* の付加を許すのでしょうか？ (34) の語に見られる共通した特徴はないのでしょうか？ 語基となる語の語末に着目すると見えてくるものがあるかもしれません。何か音の共通性がないですか？ 実はこれらの（綴り上の）語末の子音である *-j, -w, -l(e), -r* は「接近音 (approximants)」と呼ばれる音類をなすのです。すなわち英語の *-er/-est* は、「1音節、もしくは2音節かつ語末が接近音の形容詞に付加する」という制限を持っているのです。<sup>16</sup> 音の

<sup>15</sup> しかし両方の性質を持つようなものもあり (Zamma (2006, 2012)), 完全には一致しません。

<sup>16</sup> 後半の部分のような制限には音韻的な理由があることが考えられますが、今回は省略します。



種類という音韻的な条件が形態素の振る舞いを決めていますね。

上の英語の例では、1音節ないし2音節という音韻的な長さが形態規則の条件となっていました。似たような制限は日本語にはないでしょうか？ 実は日本語にもいくつか同じような制限を持った形態素が見受けられます。例えば形容詞の程度を示す「目」という形態素を考えてみましょう。この形態素をいろんな長さの形容詞語幹に付加してみてください。

- (35) a. こ・い, あま・い, おそ・い, はげし・い, おもしろ・い  
b. こい目, あま目, おそ目, はげし目, おもしろ目

多くのものは語基にそのまま「目」が付加されていますが、一つだけそうではないですね。そうです、「こい」だけは終止形の接尾辞がついたまま「目」が付加されていますね。「さ」のときはこのようなことは生じません。

- (36) 濃さ、甘さ、遅さ、激しさ、面白さ、良さ、無さ、?酸さ

このことから「目」は、「語基は2モーラ以上でなくてはならない」という語形成上の制限を持っていると考えられます。<sup>17</sup> 細部は異なりますが、音韻的な長さに関する同種の制限ですね。

ちなみにこの2モーラという長さに基づく制限は、日本語の語形成に頻出するものです。例えば人の名前の一部を切り取って、「ちゃん」をつけたり「お」を付けたりしてみましょう。ここでは「のりこ」を扱ってみます。

- (37) a. のりこちゃん, のりちゃん, のんちゃん, \*のちゃん  
b. \*おのりこ, おのり, \*おの

「ちゃん」は何も切り取らずに付加することもできますが、切り取る場合は2モーラでないといけません。このことは「はるひこ」から「はるちゃん」と「はるひこちゃん」は可能ですが、「はるひちゃん」は不可能であることからわかります。一方古い接頭辞である「お」は、何も切り取らない付加さえ不

---

またこれら以外にも、common, polite, quiet などの頻度の高い形容詞も -er/-est の付加を許すようです。

<sup>17</sup> 1モーラの形容詞語幹は数が少ないですが、「評価が良い目で」「むだ毛がない目で」などと言えますから、「濃い」に限らない一般的な制限であると思われます。

可能で、必ず語基は2モーラでないといけないようです。<sup>18</sup>

この他にも継続を表す動詞語幹の重複など（「食べ食べ」は可能だが「遊び遊び」は容認度が低い）、2モーラという単位は語形成の際に頻繁に見られます。このため、日本語でも韻脚 (foot) という単位が重要なのだと多くの研究者が認めています (Poser (1990))。副次強勢がある英語と違い、基本的に一語に一つしかアクセントが現れない日本語では韻律的な意味での韻脚の働きがそれほど明示的には現れませんが、これが人間の言語に普遍的な単位であることが伺えます。

このように音韻的な単位を基にして形態的な操作を行っている事実は、英語や日本語だけでなく世界中の言語に観察されます。このような問題は韻律形態論 (prosodic morphology) と呼ばれる学問分野で研究されています。

## 7. まとめ

この章では音韻論と形態論が関係する様々な現象を概観しました。形態的な区別の差が音韻的な振る舞いの差に影響する事実が、英語にも日本語にも多々あるということがわかったと思います。逆に音韻的な差が形態規則にも影響する、という事実も日英語ともに観察されます。このように音韻論と形態論の関係は相互方向的なのです。同様に他分野間の相互関係（統語論と音韻論など）も言語には観察されていますので、興味のある人は掘り下げて調べてみると楽しいでしょう。

## 参考文献

- 吉田優子・三間英樹 (2014) 「日本語のアクセントと英語の強勢」, 菅原真理子編『音韻論』, 朝倉書店
- 三間英樹 (2005) 「音韻論と形態論との関係—語彙音韻論」, 西原哲雄・那須川訓也編『音韻理論ハンドブック』, 英宝社.
- Poser, William (1990) Evidence for Foot Structure in Japanese, *Language* 66, 78-105.
- Zamma, Hideki (1993) Stress Retraction in English, *Tsukuba English Studies* 12, University of Tsukuba, 131-161.
- Zamma, Hideki (2006) "Dual Membership Suffixes in English," in *Bonds of Language: A Festschrift for Dr. Yasuaki Fujiwara on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, ed. by Y. Ushiro et al., 98-111, Tokyo, Kaitakusha.
- Zamma, Hideki (2012) Patterns and Categories in English Suffixation and Stress

<sup>18</sup> 「おしん」などが可能ですから、語基は1音節でも2モーラであれば構わないことがわかります。

Placement: A Theoretical and Quantitative Study. Doctoral Dissertation, University of Tsukuba, Japan (published from Kaitakusha, Japan, 2013).